

[論 文]

## 自閉症児、その他の障害児、定型発達児の母親の コーピング方略の違い

### Differences in Coping Strategies among Mothers of Children with Autism, Other Disabilities, and Typically Developing Children

ポーター 倫子<sup>\*1</sup>、山根 隆宏<sup>\*2</sup>、鈴木田 英里<sup>\*32</sup>

#### 要旨

本研究は、自閉スペクトラム症（ASD）児、他の障害（OD）児、定型発達（TD）児を持つ母親のコーピング方略の違いを検討した。対象は2～12歳のASD児、OD児、TD児を持つ母親それぞれ159名、88名、172名であった。オンライン調査でBriefCOPE日本語版を用いて分析した。その結果、子どもの年齢、障害の有無、社会経済的地位（SES）が母親のコーピング選択に影響を及ぼすことが示唆された。また、ASD児やOD児の母親は問題回避型コーピングを多用し、TD児の母親は問題接近型コーピングを用いる傾向が明らかになった。

**キーワード：**自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder）／障害（disability）／  
コーピング（coping）／精神的健康（mental health）

#### I 問題と目的

自閉スペクトラム症（ASD）児を育てる親は、子どもの問題行動、時間や経済的な制約、身体的・心理的な疲労、周りの無理解など、さまざまな困難を抱えていると言われている。日本や海外で行われてきたこれまでの研究によると、ASD児の親のストレスは非常に高く、他の障害児（OD児）や定型発達児（TD児）の親に比べてはるかに高いことが報告されてきた（Hayes & Watson, 2013; Porter & Loveland, 2019）。特に母親の育児ストレスや不安は高く（Hays, 1996）、日本においては、他国と比較して母親の育児時間が長いこと、また育児効力感が低く、子どもの行動の失敗に対して自分を責めやすいこともそのストレスに加担していると考えられる（Bornstein et al., 1998）。そのため、まず、ASD児、OD児、TD児

の母親がストレスにどのように対処しているのかを理解することが重要である。本研究では、これら3つのグループの母親におけるコーピング方略の違いを明らかにすることを目的とする。

ストレスとは、川島（2007）によれば、外界からの刺激であるストレッサー（ストレス源）が個人による認知評価の過程でストレスフルであると判断された場合に、ストレス反応を引き起こす現象である。しかし同じストレッサーに対しても、耐え難いストレスになるかどうかについては、個人差があると言われている（水内ほか, 2016）。コーピング（coping）は、ストレッサーに対処するための認知的・行動的努力と定義される。この概念は、心理学者ラザルスとフォルクマンによって提唱され、問題焦点型コーピングと情動焦点型コーピングの2種類に分類される（Lazarus & Folkman, 1984）。問題焦点型コーピングは、問題の解決に直接取り組む方法であり、具体的な行動や計画を通じて解決を図る。一方、情動焦点型コーピングは、問題により引き起こされた感情の調整を目的とし、リラクゼーションや感情の表出を通じてストレスを軽減しようとする方法である。

<sup>\*1</sup> PORTER, Noriko

北陸学院大学 教育学部 幼児教育学科  
保育原理、保育者論、子育てと支援、子どもの理解と援助

<sup>\*2</sup> YAMANE, Takahiro

神戸大学大学院 人間発達環境学研究科人間発達専攻

<sup>\*3</sup> SUZUKIDA, Eri

同志社大学心理学部心理学科

コーピングは大別すると、この2種類に分類されるが、他にもさまざまなコーピング方略の分類が検討されている(鈴木、2004)。Carverら(1989)は、ラザルスらの分類が単純すぎると指摘し、より包括的かつ詳細な視点から、COPE(Coping Orientation to Problems Experienced、15下位尺度・60項目)やBrief COPE(14下位尺度・28項目)を作成した。これらの尺度は翻訳され、日本の研究においても活用されている(大塚、2008)。

コーピングの種類と親の精神的健康について、海外を中心にこれまで行われてきた研究を概観すると、一般的に、問題解決型の対処(例:支援を求める、積極的な問題解決)は、親のストレスを軽減し、精神的健康の向上に寄与することが多いとされている(Hastings et al., 2005; 平田, 2010)。一方、否認や回避といった情動焦点型の対処は、しばしば心理的な苦痛と関連し、これらを用いると精神的健康が低くなることが報告されている(Benson, 2010; Dijkstra, & Homan, 2016; Hastings et al., 2005)。これらはTD児の親だけでなく、ASD児やOD児の親にとってもその傾向があることが示されているが、問題解決型の対処については必ずしもそうとも限らないことも報告されている(Benson, 2010)。また近年、ストレス源の質や強さに応じてコーピングが変化するという報告がなされている(Dewe et al., 1993)。このことより、子どもを養育する際の育児ストレスにおいても、子どもの特性やその特性の強度に応じて、親が取り入れるコーピング方略が異なることが予測される。

ASD児、OD児、TD児の親のコーピング方略を比較した研究はそれほど多くなく、特に日本ではその傾向が顕著である。そのような中、Dabrowska & Pisula(2010)は、これら3つのグループの親を対象にコーピングスタイルの違いを調査した。ASD児の親はTD児の親と比較して、対人的気晴らし(友人や知人との交流を通じてストレスを軽減する方法)を用いる頻度が低いことが明らかになった。この背景として、ASD児の特性による多大な育児負担があり社会的活動への参加が困難であること、社会的スティグマから支援を求めにくいことが理由として挙げられている。また、ASD児やOD児の親と比較して、TD児の親ではタスク志向型対処がストレス軽減の重要な

手段であることを示した。この理由として、TD児の親は、比較的短期的で解決可能な課題に直面することが多く、タスク志向型対処を通じて具体的な行動計画を立て、問題を解決することで効果的にストレスを軽減できると説明されている。

Dabrowska & Pisula(2010)と同様、Sivberg(2002)の研究では、ASD児の親はTD児の親と比較して、「自制」「社会的支援」「問題解決」といったコーピング方略が少なく、一方「距離を置く」「逃避回避」というコーピング方略を用いる頻度が高いことが示された。後者の理由として、ASD児の親の育児の困難さに対して、距離を置く、回避することで負担を軽減しているという合理性も考えられるが、実際の解決には結びつかないことも懸念されると述べられている。

ASD児とOD児のコーピングの方略の違いについては、これまであまり研究は行われていない。Wangら(2011)の中国における研究では、ASD児の親は他の発達障害児の親に比べて、計画立案を対処戦略として頻繁に用いる一方で、「行動的諦め」(ストレス源に対処するための努力を減らしたり、その試みを放棄すること)を用いる頻度が低いことが報告された。これは、ASD児が社会的コミュニケーションや行動面で独特の特性を持ち、予測困難な行動や感覚過敏が見られることにより(山本・浅野, 2012)、親は日常生活で多くの困難に直面し、常に計画的な対応が求められるからではないかと説明している。事前に詳細な計画を立てることで子どもの行動を予測し、適切に対応すること、またそのような積極的な対処がストレス対処の重要な手段となっていると説明されている。さらにDabrowska & Pisula(2010)の調査においても、ASD児の親は、OD児の親と比較して、対人的気晴らしを用いることは少ないことが報告されている。このことは、ASD児の育児負担が親の社会的活動を著しく制限していること、ASD児の親自身の性格が社会的活動を制御している可能性があることをほのめかしている。

これらの先行研究の知見を、Obrist(1981)が提唱したコーピングの分類法である「接近型コーピング」(問題そのものの解決を目指す)と「回避型コーピング」(問題を回避することでストレスを軽減する)の枠組みに基づいて整理した。た

例えば、積極的対処、サポートの活用、計画の立案といった方略は「接近型コーピング」に該当し、一方で、距離を置く、逃避・回避、行動的諦めなどの方略は「回避型コーピング」に分類されると考えられる。この分類をもとに先行研究を整理し、3つの群のコーピング方略の違いとして以下のような仮説を立てた。

- 1) ASD児やOD児の親は、TD児の親と比較して、問題回避型（例、「距離を置く」「逃避回避」）のコーピングを用いる割合が高い。
- 2) ASD児やOD児の親は、TD児の親と比較して、問題接近型（例、「積極的対処」「道具的サポートの使用」「情緒的サポートの使用」）のコーピングを用いる割合が高い。
- 3) ASD児の親は、OD児の親と比較して、問題接近型（例、「計画」）のコーピングを用いる割合が高く、問題回避型（例、「行動的諦め」）のコーピングを用いる割合が低い。

これまでの研究では、コーピングの因子構造が研究によって異なることが報告されている（平田, 2010; Lai et al., 2014）。例えば、ASD児の親を対象としたBrief COPEの因子分析では、Benson (2010) とHastingsら (2005) の結果に違いが見られる。具体的には、「ユーモアによる対処」は、Benson (2010) では「ポジティブな対処」カテゴリーに分類されていたが、Hastingsら (2005) では「気晴らし」カテゴリーに分類されている。このことより、本研究では、3群間の各コーピング方略の違いをまず個別に分析し、そこからどのような違いが見られるかについて検討することが重要であると考えた。

## Ⅱ 方法

### 1. 調査対象者

本研究では、2～12歳のASD児、OD児、TD児を持つ母親それぞれ150名を目標に募集した。最終的な参加者数は、ASD児群159名、OD児群88名、TD児群172名であった。参加者は、関西および北陸地域の放課後等デイサービス、幼稚園、保育所、小学校、さらに大学の広報を通じて募集し

た。なお、OD群の参加者数が目標に達しなかったため、調査会社を通じて全国から追加募集を行った。

### 2. 調査時期

2023年9月～2024年3月にかけて調査を実施した。

### 3. 調査方法

Survey Monkeyを用いたオンライン調査を行った。具体的な手続きは以下の通りである

- 1) 募集チラシを通して研究申し込みを行った研究協力者を選出基準（2-12歳児をもつ母親、障害名）に基づいてスクリーニングを行う。
- 2) 条件を満たした研究協力者には、研究調査のSurvey MonkeyリンクをE-mailで送る。
- 3) Survey Monkeyにて、調査フォームに全て回答を行った研究協力者には、アマゾンギフトカードをオンラインで送付する。

調査会社を通してのオンライン調査については、研究協力者を選出基準（2-12歳児をもつ母親、障害名）に基づいて選出した。その後選定された対象者に対しては、調査会社にSurvey Monkeyと同様の質問内容で依頼した。

### 4. 調査内容

#### ① フェイス項目

回答者の属性を明らかにするための項目であり、年齢、性別、学歴、職業、婚姻状況、家族の年収、子どもの数、子どもの年齢と性別、障害診断の有無および障害名について尋ねた。

#### ② Brief COPE 日本語版

ストレスや困難な状況への対処方法を評価する質問票で、Carver (1997) によって開発された。日本語版は、大塚 (2008) によって作成され、その信頼性と妥当性が検討されている。14の尺度（各2項目）を4段階で評価する。

- a) 積極的対処 (Active Coping) : 問題解決に向けて積極的に行動する。
- b) 計画 (Planning) : 問題解決のための具体的な計画を立てる。
- c) 情緒的サポートの使用 (Use of Emotional Support) : 感情的な支援を他者に求める。
- d) 道具的サポートの使用 (Use of Instrumental Support) : 実助的な助けや情報を他者に求



- める。
- e) 自己批判 (Self-Blame) : 問題の原因を自分自身に求め、自分を責める。
- f) ユーモア (Humor) : ユーモアを用いて状況を軽く捉える。
- g) 宗教 (Religion) : 宗教的な信念や活動に頼る。
- h) 肯定的再解釈と成長 (Positive Reframing) : 状況を前向きに捉え直し、成長の機会と見る。
- i) 受容 (Acceptance) : 状況を受け入れ、現実を認める。
- j) 否認 (Denial) : 問題の存在を否定し、直視しない。
- k) 気晴らし (Self-Distracton) : 他の活動に注意を向け、問題から気を逸らす。
- l) 行動的諦め (Behavioral Disengagement) : 問題解決の努力を放棄し、諦める。
- m) 感情表出 (Venting) : 感情を外に表し、発散する。

- n) 物質使用 (Substance Use) : アルコールや薬物に頼る。

5. 倫理的配慮

本研究は北陸学院大学の倫理審査委員会の承認(承認番号2023-3)を得て実施された。すべての参加者は、研究の目的、手続き、及びデータの匿名性について説明を受け、書面により同意を得た。

6. データ分析

本研究では、子どもの年齢とSES (Table 1 参照)、母親のコーピングの相関分析を行った。また、3つの群での母親のコーピング方略の違いについて、混合要因の2要因分散分析を行った。データ分析には、IBM SPSS Statistics version 29を使用した。

Ⅲ 結果

1. 子どもの年齢、SESと母親のコーピングとの関連

調査対象者の属性についてはTable 1で示す。

Table 1. 対象研究者の属性

		ASD			OD			TD		
		N(%)	Mean	SD	N(%)	Mean	SD	N(%)	Mean	SD
子どもの年齢 (月)			94.83	37.90		93.75	36.02		76.67	31.76
子どもの性別	男児	127 (79.87)			58 (65.90)			90 (52.32)		
	女児	32 (20.13)						82 (47.67)		
母親の年齢 (年)			40.44	6.22		39.86	5.95		38.91	6.59
母親の婚姻	結婚	138 (86.79)			55 (62.50)			162 (94.19)		
	離婚	14 (8.81)			29 (32.95)			7(4.07)		
	別居	3 (1.89)			3 (3.41)			0 (0.00)		
	独身	2(1.26)			1 (1.14)			2 (1.16)		
	その他	2(1.26)			0 (0.00)			1 (0.58)		
母親のSES*			6.16	1.32		5.93	1.41		6.51	1.25

\*SES (社会経済的地位指数) については、“Kuppuswamy’s socio-economic status scale” (Kumar et al., 2013)を参考に作成した。世帯収入、学歴、職業タイプを1~3のランクで得点化し、その合計点で示した。得点が高いほど、社会経済的地位指数が高い。

Table 2. 子どもの年齢、SESと母親のコーピング方略の相関係数

	積極的対処	計画	情緒的サポートの使用	道具的サポートの使用	自己批判	ユーモア	宗教	肯定的再解釈と成長	受容	否認	気晴らし	行動的諦め	感情表出	物質使用
子どもの年齢	-.06	-.03	-.07	-.15 **	.02	.00	-.06	-.09	-.07	.03	.06	.01	-.08	.08
SES	.17 ***	.19 ***	.02	.01	-.16 **	.02	-.12 *	.13 **	.00	-.10 *	-.03	-.17 ***	.05	-.13 **

p < .05\*, p < .01\*\*, p < .001\*\*\*

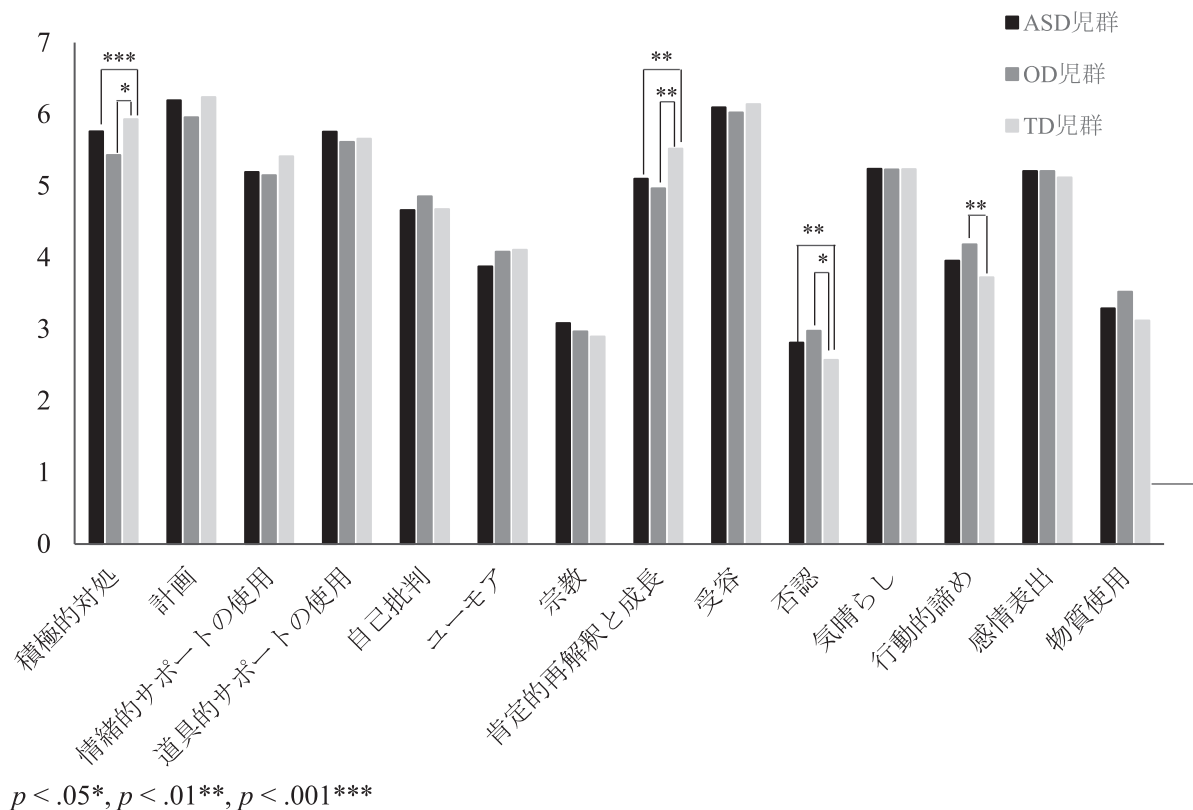


Figure 1. 各群における母親のコーピング方略

## 2. 子どもの年齢、SESと母親のコーピングとの関連

子どもの年齢、SESと親のコーピングの関連について、Pearsonの相関係数を算出した (Table 2)。その結果、子どもの年齢と「道具的サポートの使用」に有意な低い負の相関がみられた ( $r = -.15, p < .01$ )。また、SESと「積極的対処」「計画」「肯定的再解釈と成長」に有意な低い正の相関がみられた (順に  $r = .17, p < .001$ ;  $r = .19, p < .001$ ;  $r = .13, p < .01$ )。さらに、SESと「自己批判」「宗教」「否認」「行動的諦め」「薬物使用」に有意な低い負の相関がみられた (順に  $r = -.16, p < .01$ ;  $r = -.12, p < .05$ ;  $r = -.10, p < .05$ ;  $r = -.17, p < .001$ ;  $r = -.13, p < .01$ )。

## 3. 各群における母親のコーピングの相違

各群における母親のコーピングの相違を検討するために、障害種とコーピングの種類の混合要因の2要因分散分析を行った。その結果、コーピングの有意な主効果がみられた ( $F(13) = 316.70, p < .001, \eta^2 = .43$ )。また、コーピングと群に有意な交互作用が認められた ( $F(13) = 2.35, p < .001, \eta^2 = .01$ )。まず、各群におけるコーピングの単

純主効果の検定を行ったところ、全ての群においてコーピングの単純主効果が有意であった (ASD児群:  $F(13) = 2.35, p < .001, \eta^2 = .01$ ; OD児群:  $F(13) = 2.35, p < .001, \eta^2 = .01$ ; TD児群:  $F(13) = 2.35, p < .001, \eta^2 = .01$ )。また、コーピングにおける群の単純主効果の検定を行ったところ、単純主効果が有意であった ( $F(13) = 316.70, p < .001$ )。コーピングにおいてBonferroni法による多重比較を行ったところ、「積極的対処」ではOD児群よりもTD児群、ASD児群の方が有意に高かった (順に  $p < .001$ ;  $p < .05$ ) (Figure 1)。また、「肯定的再解釈と成長」ではTD児群よりもASD児群、OD児群の方が有意に低かった (順に  $p < .01$ ;  $p < .01$ )。「否認」ではTD児群よりもASD児群、OD児群の方が有意に高かった (順に  $p < .05$ ;  $p < .01$ )。さらに、「行動的諦め」ではTD児群よりもOD児群の方が有意に高かった ( $p < .01$ )。

## IV 考察

本研究では、ASD児、OD児、およびTD児の母親におけるコーピング方略の違いを検討した。その結果、以下の知見が得られた。

まず、子どもの年齢および社会経済的地位 (SES) が、母親のコーピング方略に関連していることが示された。子どもの年齢との関連については、子どもの年齢が低いほど母親による「道具的サポート」の使用が少ない傾向が見られた。先行研究においても、乳幼児を対象とした研究で、子どもの年齢の増加に伴い母親が得られるソーシャルサポートが低下することが報告されている (藤田・金岡, 2002)。また、Gray (2003) による ASD 児の親を対象とした縦断的研究においても、子どもの成長に伴い、サービス提供者への依存や家族からの支援を活用する対処が減少することが示されている。特に子どもの年齢が低い場合には、障害に対する早期支援や介入、学校や療育活動の選択が始まる時期であることが多い。このような場面では、専門家との相談や助言を受けるといった「道具的サポート」の利用が頻繁になることが想定される。

本研究では、社会経済的地位 (SES) が高い母親ほど、「積極的対処」「計画」「肯定的再解釈と成長」といった問題接近型コーピング方略を多用し、「自己批判」「宗教」「否認」「行動的諦め」「物質使用」といった問題回避型コーピング方略を用いる頻度が低いことが示された。これにより、SES が母親のコーピング選択に重要な影響を及ぼす可能性が示唆された。SES とコーピング方略の関連性に関する研究はこれまで十分に行われていないが、Glasscock ら (2013) が欧米で実施した研究では、親の SES がその子ども (14~15歳) のコーピング方略に影響を与えることが明らかにされている。特に女子において、親の SES が高い場合、問題接近型コーピングの使用が増加し、問題回避型コーピングの使用が減少することが報告されている。本研究の結果は、SES が母親のコーピング方略に与える影響を示すこの先行研究とも一致しているが、親における SES とコーピング行動との関係を分析した研究は依然として限られている。今後の研究では、親の SES を視野に入れつつ、どのようなコーピング方略が親自身のメンタルヘルスの改善や親子関係の改善につながるかを検討していくことが重要である。

本研究では、ASD 児、OD 児、TD 児の母親の 3 つの群において、母親が使用するコーピング方

略に違いがあることが明らかとなった。分析の結果、有意差が認められたのは、「積極的対処」や「肯定的再解釈と成長」といった問題接近型コーピング、および「否認」や「行動的諦め」といった問題回避型コーピングに関する項目であった。

「積極的対処」においては、ASD 児群や OD 児群に比べて TD 児群の得点が有意に高いという結果が得られた。この結果は、問題接近型コーピングは ASD 児群や OD 児群よりも TD 児群で高いとする第 2 仮説を支持するものである。また、「肯定的再解釈と成長」に関しては、TD 児群よりも ASD 児群および OD 児群の得点が有意に高いことが示され、この仮説をさらに裏付ける結果となった。

一方、「否認」では、TD 児群に比べて ASD 児群および OD 児群の得点が有意に高いという結果が示された。筆者らの知る限り、「否認」に関するコーピング方略の差異は先行研究で示されていないが、これが問題回避型コーピングに属する方略であると考えられるため、第 1 仮説を支持するものと考えられる。また、「行動的諦め」については、TD 児群に比べて OD 児群の得点が有意に高いという結果が得られた。このことから、ASD 児や OD 児の母親は、TD 児の母親と比較して問題回避型コーピングをより多く用いるという第 1 仮説を部分的に支持する結果が得られた。

これらの結果を総合すると、ASD 児や OD 児の母親は、TD 児の母親と比較して問題回避型コーピングを多く用い、一方で問題接近型コーピングを用いる頻度が少ないという、先行研究 (Dabrowska & Pisula, 2010; Sivberg, 2002) の知見を支持する結果が得られた。なお今回の分析では、第 3 仮説において ASD 児群と OD 児群の間に先行研究で指摘されているような有意差は認められなかった。しかし ASD 児の母親は OD 児の母親よりも重篤なストレスを経験していることを考慮すると (Hayes & Watson, 2013; Porter & Loveland, 2019)、今後は、障害の特徴が親のコーピング方略とどのように関連しているのかを明らかにすることが重要である。親のコーピング方略に関するインタビュー調査などを実施し、さらに検討を進めていきたい。

今回の調査では、「情緒的サポートの使用」や

「道具的サポートの使用」といった社会的支援に関して、3群間に有意な違いは見られなかった。Dabrowska & Pisula (2010) は、ASD児の特性に伴う大きな育児負担が、社会的活動への参加を困難にし、社会的スティグマの存在が支援を求めることを妨げる要因であると指摘している。また日本国内の研究でも、ASD児を育てる家族が周囲の誤解や無理解によって不愉快な経験をしたり、スティグマを感じたりすることが報告されている(ポーターら, 2018)。一方で、ASD児を育てる過程において、医療・福祉・学校機関からの支援や助言、情報提供が必要とされるほか、同じ障害を持つ親からの支援によって育児ストレスが軽減されることも報告されている(山根, 2019; 柳澤, 2012; 湯沢ら, 2007)。これらの点を踏まえると、ASD児の親もTD児の親と同様に「情緒的サポート」や「道具的サポート」を利用する可能性があるため、今後さらに詳細な検討が求められる。

本研究の限界として、母親が経験するストレスが子育てに限定されていない可能性が挙げられる。例えば、仕事や夫婦関係といった家庭環境から生じるストレスも含まれるため、それらに対するコーピング方略も含めて、より詳細な分析が求められる。水内ら(2016)の研究では、母親がストレスを強く感じる主要因として、子どもに直接起因するものだけでなく、家族や社会とのつながり、さらには母親自身のアイデンティティも影響していることが示唆されている。また、本研究では、社会経済的リソースが少ない家族が問題回避型コーピングを選択する傾向が示された。この結果を踏まえ、リスクとなるストレス源の数や質を考慮しつつ、コーピング方略との関係を総合的に検討していく必要がある。

## V おわりに

本研究では、ASD児、OD児、TD児を持つ母親のコーピング方略の違いについて検討した。日本において、ASD児を持つ親のコーピングに関する研究は極めて限られており、さらにOD児やTD児の親との比較研究は筆者らの知る限り存在していなかった。この点から、本研究は重要な学術的意義を持つといえる。

本研究の結果、母親のコーピング選択において、

子どもの年齢、障害の有無や社会経済的地位(SES)が大きな影響を与えることが示唆された。また、ASD児やOD児の母親は問題回避型コーピングを多用する一方で、TD児の母親は問題接近型コーピングを多く用いる傾向が明らかとなった。これらの結果は、ASD児やOD児を持つ母親が、特有の育児負担や社会的要因により異なるコーピング方略を採用している可能性を示している。

今後の研究では、これらのコーピング方略が母親のメンタルヘルスにどのような影響を及ぼすのかを明らかにしていきたい。また、障害の種類や有無にとどまらず、子どもの問題行動や特性といった要因にも注目し、それらがコーピング選択に与える影響を検討することで、3群間のさらなる違いを包括的に分析していきたい。

## 〈文献〉

- Benson, P. R. (2010). Coping, distress, and well-being in mothers of children with autism. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 4(2), 217-228.
- Bornstein, M. H., Haynes, O. M., Azuma, H., Galperin, C., Maital, S., Ogino, M., Painter, K., Pascual, L., Pêcheux, M.-G., Rahn, C., Toda, S., Venuti, P., Vyt, A., & Wright, B. (1998). A cross-national study of self-evaluations and attributions in parenting: Argentina, Belgium, France, Israel, Italy, Japan, and the United States. *Developmental Psychology*, 34(4), 662-676. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.34.4.662>
- Carver, C. S. (1997). You want to measure coping but your protocol's too long: Consider the Brief COPE. *International Journal of Behavioral Medicine*, 4(1), 92-100.
- Dabrowska, A., & Pisula, E. (2010). Parenting stress and coping styles in mothers and fathers of pre-school children with autism and Down syndrome. *Journal of Intellectual Disability Research : JIDR*, 54(3), 266-280. <https://doi.org/10.1111/j.1365-2788.2010.01258.x>
- Dewe, P., Cox, T., & Ferguson, E. (1993). Individual strategies for coping with stress at work: A review. *Work & Stress*, 7(1), 5-15. <https://doi.org/10.1080/02678379308257046>
- Dijkstra, M. T., & Homan, A. C. (2016). Engaging in rather than disengaging from stress: Effective coping and perceived control. *Frontiers in Psychology*, 7, 1415. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2016.01415>



- 藤田大輔・金岡緑. (2003). 乳幼児を持つ母親の精神的健康度に及ぼすソーシャルサポートの影響. *日本公衆衛生雑誌*, 49, 305-312.
- Glasscock, D. J., Andersen, J. H., Labriola, M., Rasmussen, K., & Hansen, C. D. (2013). Can negative life events and coping style help explain socioeconomic differences in perceived stress among adolescents? A cross-sectional study based on the West Jutland cohort study. *BMC Public Health*, 13, 532. <https://doi.org/10.1186/1471-2458-13-532>.
- Gray, D. E. (2002). Ten years on: A longitudinal study of families of children with autism. *Journal of Intellectual and Developmental Disability*, 27(3), 215-222. <https://doi.org/10.1080/1366825021000008639>
- Hastings, R. P., Kovshoff, H., Brown, T., Ward, N. J., Espinosa, F. D., & Remington, B. (2005). Coping strategies in mothers and fathers of preschool and school-age children with autism. *Autism : The International Journal of Research and Practice*, 9(4), 377-391. <https://doi.org/10.1177/1362361305056078>
- Hayes, S. A., & Watson, S. L. (2013). The impact of parenting stress: A meta-analysis of studies comparing the experience of parenting stress in parents of children with and without autism spectrum disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 43(3), 629-642. <https://doi.org/10.1007/s10803-012-1604-y>
- Hays, S. (1996). *The cultural contradictions of motherhood*. Yale University Press.
- 平田祐子. (2010). コーピングタイプと精神的健康との関係に関する研究の動向：社会福祉実践への応用に向けて. *関西学院大学人間福祉学部人間福祉研究科紀要 Human Welfare*, 2 (1), 5-16.
- 川島一晃. (2007). 成長へ結びつけるコーピング研究の理論的検討 ― 新しいコーピング理論としての Proactive Coping Theory ―. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学*, 54, 93-101.
- Kumar B. P. R., Dudala S. R., & Rao A. R. (2013). Kuppaswamy's socio-economic status scale's revision of economic parameter for 2012. *International Journal of Research & Development of Health*, 1, 2-4.
- Lai, W.W., & Oei, T.P.S. (2014). Coping in Parents and Caregivers of Children with Autism Spectrum Disorders (ASD): a Review. *Review Journal of Autism Developmental Disorders*, 1, 207-224. <https://doi.org/10.1007/s40489-014-0021-x>
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. Springer.
- 水内豊和・島田明子・成田泉. (2016). 自閉スペクトラム症幼児の母親を対象としたストレスコーピングの違いによるペアレント・プログラムの効果. *富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究*, 11, 81-86.
- Obrist, P. A. (1981). *Cardiovascular psychophysiology: A perspective*. Plenum Press.
- 大塚泰正. (2008). 理論的作成方法によるコーピング尺度：COPE. *広島大学心理学研究*, 8, 121-128.
- Porter, N., & Loveland, K. A. (2019). An integrative review of parenting stress in mothers of children with autism in Japan. *International Journal of Disability Development and Education*, 66(3), 249-272. <https://doi.org/10.1080/1034912X.2018.1439159>
- ポーター倫子・キャサリンラブランド・落合正行・森本佳奈. (2018). 自閉スペクトラム症児を養育する母親の体験するスティグマ研究：第一報 グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析. *小児保健研究*, 77(5), 458 - 468.
- Sivberg B. (2002). Family system and coping behaviors: a comparison between parents of children with autistic spectrum disorders and parents with non-autistic children. *Autism : The International Journal of Research and Practice*, 6(4), 397-409. <https://doi.org/10.1177/1362361302006004006>
- 鈴木伸一. (2004). 3次元(接近・回避, 問題-情動, 行動-認知)モデルによるコーピング分類の妥当性の検討. *心理学研究*, 74 (6), 504-511. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.74.504>
- Wang, P., Michaels, C.A. & Day, M.S. (2011). Stresses and Coping Strategies of Chinese Families with Children with Autism and Other Developmental Disabilities. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 41, 783-795. <https://doi.org/10.1007/s10803-010-1099-3>
- 山本真実・浅野みどり. (2011). 自閉症スペクトラム障害の子どもと母親のコミュニケーションに関する国内文献レビュー. *家族看護学研究*, 17(2), 75-85.
- 山根隆宏. (2019). 自閉症スペクトラム障害児者をもつ親のオンラインソーシャルサポート利用の実態と関連要因. *神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀*



要, 13(1), 73-80.

柳澤亜希子. (2012). 自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性. *特殊教育学研究* 40(4), 403-411.

湯沢純子・渡邊佳明・松永しのぶ. (2008) 自閉症児を育てる母親の子育てに対する気持ちとソーシャルサポートとの関連. *昭和女子大学生生活心理研究所紀要*, 10, 119-129.

## 謝辞

本研究はJSPS科研費（課題番号「23K02269」「18KK0055」ポーター倫子）の助成を受けたものです。

